



熊本県中央児童相談所
所長 **たかみずま 高三 渚**
年々増加している
虐待相談件数
子どもたちのために里親を—

子どもたちが健やかに育つ
という環境をどれだけ大
人が作り上げるかというの
は、我々大人にとって一つの大きな
責任だろーと思います。御船町
を含め熊本県全体でもその考え
方に基づいてさまざまな施策の
展開をしているところです。子
どもが健やかに育つことは誰も
が願うところですが、残念ながら
、非常にその厳しい現実にも
立たされています。

あまりの虐待の相談件数があり
ます（平成29年度）。熊本県で
は、1248件（平成29年度）。
相談件数は約20年にわたって
も、1回も減ることなく右肩上
がりで増えてきているのが実状
です。それだけ子育てに不安を
持つ、親子の関係がなかなかス
ムーズにいかない状態が続いて
いると思います。一緒に子ども
と生活できないときには、児童
養護施設や乳児院などの社会的
養護を主にしている施設で担っ
ているのが大半でしたが、最近
では少しずつ、里親さんを見つ
ける、ことを進めています。県
内においても虐待の問題が非常
に増えてきており、それに対す
る手段として、施設の人ととも
に里親さんの助けが必要です。
また、国では新しい社会的養育
ビジョンで、これからの子育て

すすむ
晋

をどういう風に考えていくかと
いったことが進められていま
す。そこには、児童相談所の更
なる機能強化とともに、市町村
では、地域の母子保健を中心と
した子育て支援などをどれだけ
充実させていくのかも含まれて
います。

少しずつ子どもたちをいろん
な家族でみていくこと。それは
実の親あるいは実の祖父母や親
戚といった『血のつながり』だ
けでなく、『地域のつながり』
という力で子どもたちを育てて
いくことが今必要になっていっ
ています。

大事なものは、行政が何をすべ
きかとか、あるいは子育て、里
親制度の仕組みがとかだけでは
なく、私たち大人一人一人の気
持ちの持ちようではないかと思
います。少し肩の力を抜いて、
考えてみるのが大切です。

社会的養護が必要な子どもに
は、特定の大人と継続的に関
わりを持ち、育てられるという経験
が、その後の社会に巣立っていくた
めには必要であり、大きな宝物にな
るのだと思います。しかし、子ど
もたちの里親家庭での生活がスムー
ズに進むのかというところではあり
ません。ほとんどの里親は、まず子
どもたちの試し行動の試練を受け
ます。里親さんは、子どもたちに愛
情をもち接します。ですが、子ども
にとっては、知らない場所であらな
い大人との生活が始まり、本当に自
分のことを育ててくれるのかと不安
で心配なことばかりです。その気持
ちは行動に表れ、さまざまな問題と
なり手のかかる子育てにつながって
いくことがよくあります。そこで子
育てを里親だけに任せるのではなく
て、児童相談所や県内各地の児童養
護施設、乳児院にいる里親支援専門

特定非営利活動法人 **優里の会**
はちや **八谷 八谷 齊**
理事長



里親に返ってくるもの
子どもとの出会いで
地域社会を支える存在に

員や熊本県里親協議会そして、私た
ち優里の会で里親さんの子育てを支
える取り組みを行っています。社会
全体で子どもを育てる、それが里親
養育ではないのかと思っています。

里親さんの子育てというのは大変
ですが、覚悟も必要。しかし、返っ
てくるもの、というものとても大
きなものがあると思います。それは、
子どもを育てることです。子どもの成長
に対する満足感や、また、子育てに
よって里親さん自身も人間的に成長
ができる喜びです。そして、子ども
さんを通していろいろな人との出会い
があり、知り合いになって社会的な
いろいろな体験を積んでそれを進展さ
せていくことができると思います。
「里親」という存在が、地域社会を
支える重要な存在になってくれるん
じゃないかなと思っています。

子どもたちを支える 「もう一つの家庭」 それが“里親”

里親制度とは—

さまざまな事情により家庭での養育が困難または、受け
られなくなった子どもたちを温かい愛情と正しい理解を
持った家庭環境の下で養育する制度です。

家庭での生活を通じて、子どもが成長する上で極めて重
要な特定の大人との愛着関係の中で養育を行うことによ
り、子どもの健全な育成を図ります。

親と一緒に暮らせない時代を過ごしている
子どもたちがどれくらいいると思いますか？

家庭で暮らすことができない子どもたち
のためにできた“里親制度”。

その里親制度や里親の現状について、関
わりを持つ3人の対談が行われました。

熊本県の社会的養護の現状や里親家庭が
もたらす子育てへの期待などについて焦点
を当てました—

子育てに優しい町づくりを
子どものために
コミュニティから見守り応援隊を—



御船町役場

町長

ふじき まさゆき
藤木 正幸

私にとっても子どもというの
は生きる原動力になりま
す。この町に生を受けた子ども
たちに、私たちは自然豊かなふ
るさとを残し、子どもたちがこ
の町に住み続けようと思えるよ
うな地域コミュニティをつくり
たいと思います。

子育て家族にとって、「子育
てしやすい町づくり」と「子育
てに優しい町づくり」が挙げら
れますが、子育てしやすい町と
は、ハード面という捉え方があ
ると思います。お金がかからな
い仕組みづくりであったり、施
設や交通また、情報交流が整っ
ていて便利であるなどと町とし
ての政策が大きく関わる子育て
事業です。今回の課題である「里
親制度」は、子育てに優しい町
づくりというソフト面だと思い
ます。本町においては、これま
でも、子どもにも、子どもの
見守り活動や地域でのふれあい
活動など各種団体活動また、地
域ネットワークにおいて子ども
たちを見守っていただいていま
す。その中で、さまざまな事情
により、家庭での生活が困難な
子どもたちが数多く存在するこ
とも事実であり、目をそらすこ
ともできないと思います。

震災を受けて一番大事だった
のがやはり近所の方々の対話や
関わりであったと思います。『家
族』という定義の中において私
は、一つの家に住んでいるのが
家族ということではないと思い
ます。子どもにとってお父さん
お母さんがいたならば、お父さ
んお母さんの兄弟ももちろん家
族です。おじいちゃんやおばあ
ちゃん、そこに関わる世代世代
でいる親戚は全て家族です。そ
のため一人の子どもにはたくさ
んの人たちが、見守り応援隊、
として存在するという家族の意
味があります。そういった見守
り応援隊によって、子供たちを
見守っていくことが、私たちに
とって優しい町づくりの第一歩
だと思っています。やはりコミュ
ニティの中から芽生えてくるも
の、そこに対して支援制度と
いったものやコミュニティ重視
の見守り体制をつくっていくと
いうことが、家族にとって優し
い町づくりだと思います。

私も里親になって10年が経
過しようとしています。私が
選んだ道というのが『養育里親』
です。短期間に子どもを預かり、
その子どもたちに温かい家庭を
体験してもらいたいという思い
があります。里親は、気持ちさ
えあればできることであり、難
しいことではないと思います。

私が思う里親の根本にあるも
のは、「子どもを預かるのか」、
「子どもを育てるのか」。子ども
を育てるからこそ、里親の意義
があると思いました。1、2カ
月の短期の子どもたちやそれ以
上の長期間にわたる子どもたち
もいるかもしれませんが、自分
の子どもとして育てる、「育て
る預かり方」を今後も続けてい
きたいと思っています。

「伝えなければ何も変わらな
い、言い続けなければ何も変わ
らない」ということを感じてい
ます。子どもたちが夢をもって
将来に向かって進んでいけるよ
うに、私自身も町長として、そ
して里親として頑張っていきた
いと思います。御船町が目指
す子育てに優しい町づくりの中
で、里親の存在が大事になって
くるんだと確信します。